

令和 2 年 6 月 27 日現在

機関番号：12401

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2018～2019

課題番号：18H05554・19K20765

研究課題名（和文）ヴァチカン図書館所蔵ビザンティン詩篇写本の画像生成

研究課題名（英文）Research on the Illustrations of Cod. Vat. gr. 1927

研究代表者

辻 絵理子 (Tsuji, Eriko)

埼玉大学・人文社会科学部研究科・准教授

研究者番号：40727781

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,900,000円

研究成果の概要（和文）：ヴァチカン図書館所蔵ギリシア語写本1927番（以下「1927番」）は、旧約聖書の『詩篇』を本文とし、テキストの間に100以上の豪華な画像を有する12世紀前半に制作された写本である。ビザンティン世界の詩篇写本には旧約聖書である本文に対し、新約聖書や他の典拠に基づく挿絵を描く複雑な機能を持つ作例があるが、1927番もまた、他に類例のない多様な挿絵を持っている。本研究は、1927番に描かれた、詩篇著者とされる旧約の王ダヴィデが登場する箇所、及び新約聖書の物語画像を中心に、他に類例のない同写本の全体像を明らかにする試みである。同写本に焦点を絞った総合的な研究は、本研究計画が世界で初めてのものである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまで系統立てた分析が行われてこなかった1927番の、キリスト伝と旧約物語場面が関連付けられて表象されている箇所を、写本本文および画像に関連するテキストと併せて分析、検討した。具体的には、旧約聖書と新約聖書の内容を、挿絵によって関連づけている箇所を明らかにすることで、中世における正教圏の神学的解釈を実証的に検討した。これは既に滅びてしまった国が遺した一冊の書物に過ぎないと思われるかもしれないが、カトリックとイスラームの狭間で千年間存続した帝国の思想の一端を探る具体的な研究である。

研究成果の概要（英文）：Cod. Vat. gr. 1927 is one of the important manuscripts in the Byzantine world, which has many illustrations on psalms made in around the twelfth century. This research schemes for a comprehensive analysis of Cod. Vat. gr. 1927, especially focused on David representations and Christological illustrations.

研究分野：西洋美術史

キーワード：ビザンティン美術 写本挿絵 詩篇 聖堂装飾

1. 研究開始当初の背景

ヴァチカン図書館所蔵ギリシア語写本 1927 番 (以下「1927 番」) は、旧約聖書の『詩篇』を本文とし、テキストの間に 100 以上の豪華な図像を有する、12 世紀前半に制作された写本である。ビザンティン世界の詩篇写本には、旧約聖書である本文に対し、新約聖書や他の典拠に基づく挿絵を描く複雑な機能を持つ作例があるが、1927 番もまた、他に類例のない多様な挿絵を持っている。

ビザンティンにおける詩篇写本研究では、1970~80 年代に相次いでモノクロ図版が出版され、イコノクラスムとの関連などを探る個別の研究が進められた。当初多くの研究で収録された図版が挿絵のみだったこともあり、どこに何が描かれているかは明らかにされたものの、主題の選択とその理由、及び本文と挿絵の関係を巡る研究は端緒についたばかりと言える。特に全頁大の挿絵を持つ詩篇写本については近年やや研究が行き詰っており、欄外註として書き込まれたテキストの、神学研究における成果を待つ状態になっている。1927 番と、ヴァチカン図書館所蔵ギリシア語写本 752 番 (以下「752 番」) は全頁大挿絵に加えて、本文 (1927 番) あるいは欄外註 (752 番) のコラム幅の挿絵をテキストの間に描く写本だが、挿絵数の多さと内容の複雑さ、類例の少なさから、写本全体を見据えた先行研究は乏しい。

本研究は、1927 番に描かれた、詩篇著者とされる旧約の王ダヴィデが登場する箇所、及び新約聖書の物語図像を中心に、他に類例のない同写本の全体像を明らかにする試みであった。1927 番は、近年神学や歴史学の立場からも注目を集めている詩篇写本、752 番との密接な関係を指摘されているが、同写本に焦点を絞った総合的な研究は、本研究計画が世界で初めてのものである。

2. 研究の目的

これまで系統立てた分析が行われてこなかった 1927 番の、キリスト伝と旧約物語場面関連付けて表象されている箇所を、写本本文および図像に関連するテキストと併せて分析、検討することが目的であった。

具体的には、旧約聖書と新約聖書の内容を、挿絵によって関連づけている箇所を明らかにすることで、ケース・スタディではあるが、中世における正教圏の神学的解釈を実証的に検討した。ビザンティン美術史研究は現存作例の乏しさ、史料の少なさがネックとなるが、それは歴史学や神学など他の分野においても同じことである。そのため複数の学問分野を横断するかたちで研究を進めていくことが不可欠であるが、本研究計画はその一歩であった。752 番の欄外註 (主にエルサレムのヘシュキオス) については、現在のところ、ストックホルム大の B. クロステニーを中心とした翻訳プロジェクトが数年前から告知されているものの、未だその成果の公開には至っていない。1927 番の本文と図像、そして関連テキストをまとめる本研究のような成果を今後発展させていくことは、一冊の写本のみならず、関連する 752 番のような写本研究への手掛かりや、他の研究分野の援けにもなり得るだろう。

3. 研究の方法

本研究では、1927 番全体の図像とテキストの関係を分析した。なかでも、図像の配置によって、新旧約の対比が暗示されている箇所に着目した。具体的には、旧約聖書に登場するダヴィデの息子アブサロムと、十二使徒のひとりで師を裏切ったユダを対比させて描く f.204 のように、上下や左右に形態 / 意味内容において類似した図像を並べることで、両者の関係を示唆するような箇所を重点的に扱った。なおこの場合のアブサロムとユダの表現では、死に際して木に吊られる視覚的な類似と、父 (師) を裏切る者という意味内容における類似とが示されている。

さらに、繰り返し描かれるキリスト、ダヴィデの表象も併せて分析を行った。詩篇著者と目されているダヴィデの肖像が何度も登場することは珍しいことではないが、キリストの姿もまた反復される。旧約聖書の一部である詩篇本文に、新約聖書の登場人物や物語の図像が描かれることはビザンティン詩篇写本の一様式である余白詩篇の特徴であるが、予型論的解釈について指摘されてこなかった 1927 番の挿絵についても、類似する機能があることを中心に確認した。

4. 研究成果

現地調査を含む、1927 番の基礎的な研究を進められたことが、第一に挙げられる。むろん調査しただけでは成果にならないが、折よく科学研究費研究成果公開促進費の助成が叶い、かねてから準備中であった詩篇写本挿絵に関する研究をまとめ単行本が 2018 年内に刊行された。

本科研費の研究期間に、丁度この単行本の入稿から責了までの作業期間が重なっていたため、むろん制度の許す修正範囲内に留めてはいるものの、本科研費で得られた成果を随所に取り加え、単行本の内容に加筆修正した上で出版することが出来た。

現地調査では、聖堂においては写真資料の撮影を行い、各国図書館写本室においてはオリジナル写本と画像資料の調査を行った。

特に 2019 年夏に行ったギリシアにおける調査では、これまでに実見したことのなかった聖堂や資料を確認することが出来たのは大きな収穫であった。既に発表している論文の裏付けとなる画像の撮影も行うことが叶ったが、幾つかの点で追加の調査が必要となったため、こちらの論文は今のところ準備段階に留まっている。

2018 年度中に発表した研究成果としては、先に述べた単著（『ビザンティン余白詩篇写本挿絵研究』、中央公論美術出版、2018 年）に加え、鹿島美術財団年報に掲載した論文と、リベラル・アーツ研究会における口頭発表が挙げられる。

単著についてはタイトルの通り、余白形式の詩篇写本挿絵に関する研究を主に扱ったが、いわゆる貴族詩篇と呼ばれる全頁大挿絵の写本や、本研究計画で扱った 1927 番について論じた章も収めることが出来た。鹿島美術財団年報の論文では、これまで存在しないとされていた 1927 番の予型論的挿絵を具体的に指摘し論じた。口頭発表は、専門外の研究者を主な対象とした会であったため、解り易さを重視しつつまだ解決されていない問題点を紹介した。ここでは様々な分野の研究者の方々から、興味深い知見を頂くことが出来た。

2019 年度は、『美術史研究』に「昇天に関する覚書」が掲載された。

同年度は授業や委員会を始めとする通常業務に追われ、口頭発表を行わなかったこと、準備していた 1927 番の画像と頌歌の挿絵に関するもう一本の論文を、年度内に出版可能な媒体に投稿することが叶わなかったことが反省点として挙げられる。

頌歌とは、詩篇写本の巻末に収録されるテキストで、新旧約聖書の韻文を抜粋したものであり、詩篇本文と比べると物語性が強く、様々な様式の詩篇写本において挿絵が描かれる。余白形式の写本においても、例外的に本文の挿絵形式とは異なるかたちで画像が配されることが多く、コラム・ピクチャー（本文コラム幅に収められた挿絵）や、全頁大挿絵として描かれる。画像そのものは、物語からの抜粋が多いこともあってか、素直に典拠となったテキストの内容を描くことが多く、何の場面が描かれているか一目で判るものばかりであるためか、解釈に踏み込んだ研究は今のところ殆どない。しかし、一部の作例では定型から外れたテキストとの関係やレイアウトを有しているものも見られるため、今後積極的に検討、分析を進めていきたいと考えている。その一本目となる準備中の論文については、既に本文は完成しているが、投稿が遅れてしまった分、改めて最新の研究状況を加筆してから発表することを予定している。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 辻絵理子	4. 巻 35
2. 論文標題 ビザンティン詩篇写本挿絵におけるダヴィデの表象 Cod. Vat. gr. 1927のキリスト伝画像を中心に	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 鹿島美術研究	6. 最初と最後の頁 1 7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 辻絵理子	4. 巻 57
2. 論文標題 昇天に関する覚書	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 美術史研究	6. 最初と最後の頁 143-149
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 辻絵理子
2. 発表標題 ビザンティン美術研究－11世紀詩篇写本挿絵の重層的な画像プログラム
3. 学会等名 2018年度第2回リベラル・アーツ研究セミナー（招待講演）
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 辻絵理子	4. 発行年 2018年
2. 出版社 中央公論美術出版	5. 総ページ数 272
3. 書名 ビザンティン余白詩篇写本挿絵研究	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----